

平城京および周辺寺院出土 長沙窯系陶磁器の再整理

1 はじめに

奈良文化財研究所では、東アジアにおける陶磁器¹⁾・窯業生産研究の一環として平城宮・京出土の陶磁器の再整理を進めている。本稿では、これまで日本でも一定数の出土例が知られている「長沙窯系陶磁器」の再整理成果を報告する。ここでは、黄味がかかる釉や白化粧、型押し貼付文、褐色また緑色の釉下彩など長沙窯の代表的な技法を手がかりに、こうした特徴のある製品を長沙窯系陶磁器としてとらえ²⁾、平城京および周辺寺院における陶磁器の再整理の中で見出された出土品を報告する³⁾。

(丹羽崇史・陳彦如／大阪市立東洋陶磁美術館)

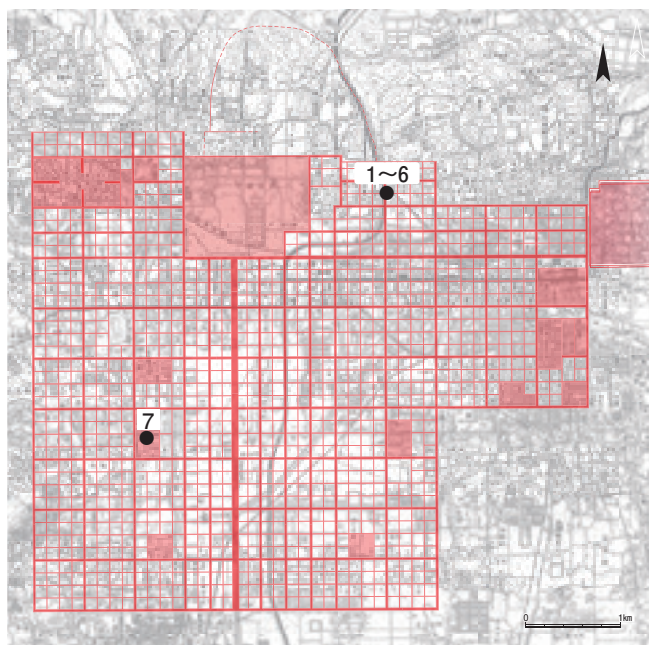
2 長沙窯系陶磁器に関する先行研究

長沙窯の成立・展開 長沙窯は湖南省長沙市望城区の湘江東岸の石渚湖一帯に所在する窯跡で長沙銅官窯ともいう。製品の造形・文様・胎土・釉薬や窯道具のセット関係の検討から、長沙窯は湖南省岳陽市湘陰県に所在する青竹窯、岳州窯の影響を受けて唐代に成立したと考えられている⁴⁾。

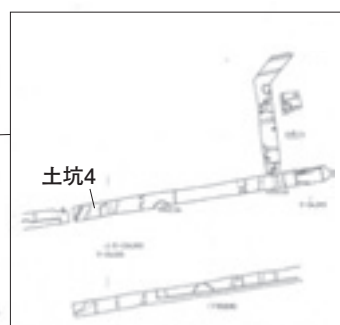
長沙窯の生産品は多岐にわたるが、多くを占めるのが黄釉釉下彩の陶磁器である。①薄い化粧土を施す、②釉下彩として褐釉・緑釉で表現する、③型押し貼付文を用いる、といった特徴を有する⁵⁾。

長沙窯出土品は1980年の報告で3期編年が提示され、第1期は唐の初期から元和年間、第2期は元和年間から大中年間、第3期は咸通年間から五代としている⁶⁾。一方、周世榮は、長沙唐墓出土陶磁器の編年から、長沙窯陶磁器の出現を盛唐時期(氏の編年の第二期、684-756)とし、五代に衰退するとする⁷⁾。また、長沙窯系陶磁器は東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、アフリカなどの各地の出土品が注目され、長沙窯は中国国内向けというよりも、海外への輸出用のものを中心に生産したと評価される⁸⁾。

奈良・平安時代の日本出土長沙窯系陶磁器 日本において長沙窯系陶磁器は、白瓷、越州窯系青瓷とともに、8世紀後半以降に出現する「初期貿易陶磁器」の一つに位



平城京



法隆寺旧境内

図41 報告資料の出土地点

置付けられているが、白瓷、越州窯系青瓷に比べ、出土数は少なく、ほとんどが9世紀以降のものである。日本で出土したものは型押し貼付文で装飾され、そこに褐釉を施した水注が多く、そのほか少量器種として、壺・皿・盤・碗・杯などがある⁹⁾。三上次男は、政治の中心であった平安京の所在した京都市、および大宰府の所在した福岡県北部に土地が集中することを指摘し、貴族階層や寺社などで主に用いられたものと推測する¹⁰⁾。

小 結 以上のように長沙窯系陶磁器については、生産地側の調査の進展により、製品の特徴や時期変遷があきらかになりつつある。ただし、白瓷や青瓷と同様、日本出土品と生産地側の製品との詳細な突き合わせは今後の課題であるとする。

(丹羽)



図42 平城京および周辺寺院出土長沙窯系陶磁器

3 平城京および周辺寺院から出土した長沙窯系陶磁器

奈文研が所蔵する平城京と周辺寺院から出土した長沙窯系陶磁器について以下に報告する¹¹⁾ (図41～44・表4)。

平城京東三坊大路 1～6¹²⁾ は東三坊大路東側溝SD650出土。このうち2はSD650A、それ以外はSD650B出土 (平城第57次『学報 23』)。いずれも外面は白化粧土の上に釉がかかり、釉はオリーブ黄色でガラス質が強く、細かい貫入がまんべんなく入る。胎土は灰白色で、緻密で粒子が均一的である。内面のロクロ目の間隔は5～7mm。

1は水注もしくは壺の口縁部から肩部。頸部直下に耳を縦方向に貼り付けた痕跡が残る。外面は全体に白化粧土の上に釉がかかり、内面は頸部に白化粧土が、肩部先端以外に釉がかかる。復元口径12.0cm。

2は水注もしくは壺の頸部から肩部。外面は全体に白化粧土の上に釉がかかり、内面は頸部に断片的に釉のみがかかる。肩部の直下に褐彩を施す。

3は水注もしくは壺の肩部。外面は全体に白化粧土の

上に釉がかかる。内面は頸部に一部釉がかかり、全体に微かに自然釉が確認できる。

4は水注もしくは壺の胴部。外面は全体に白化粧土の上に釉がかかり、内面は全体に微かに自然釉が確認できる。内面には捻じれ皺の痕跡があり、ロクロが逆時計回りで回転したことを示す¹³⁾。

5は水注もしくは壺の縦方向の耳の下端部と胴部。外面は全体に白化粧土の上に釉がかかる。内面は上端に一部釉がかかり、全体に微かに自然釉が確認できる。

6は水注もしくは壺の胴部。外面は全体に白化粧土の上に釉がかかり、内面は全体に微かに自然釉が確認できる。内面の捻じれ皺の痕跡はロクロが逆時計回りで回転したことを示す。

以上のようなSD650出土品のうち、1・2は別個体と考えられる。一方3～6は1・2と同一個体の可能性があるが、接合関係は認められない。

薬師寺旧境内 7は薬師寺西僧房跡大房床面出土¹⁴⁾ (平城第88-21次『学報 45』)。水注の口縁部および胴部側面の破片¹⁵⁾。3本の紐からなる把手が胴部上端につき、紐の上下端は横方向から押されて扁平となる。型による薄さ1～2mmの葡萄文を把手の下端から体部にかけて貼り付ける。白化粧土の上に釉がかかり、頸部の内面に白化粧土と釉の範囲のずれが確認できる。胴部中央に6本の沈線がある。釉はオリーブ黄色で、細かい貫入がまんべんなく入る。貼付文には褐彩を施す。胎土は灰白色で、緻密で粒子が均一的である。内面のロクロ目の間隔は5～7mm。復元口径11.6cm、復元高18cm。

法隆寺旧境内 8は聖霊院・綱封蔵南地区土坑4出土¹⁶⁾ (平城第131-35次調査)。碗の口縁部。外面は白化粧土の上に釉がかかる。釉は淡黄色でガラス質が強く、細かい貫入がまんべんなく入る。胎土は灰白色で、緻密で粒子が均一的である。復元口径17.2cm。蛇の目高台がともなう稜碗の可能性はある¹⁷⁾。

(陳・丹羽)

4 まとめ

本稿では平城宮・京から出土した陶磁器のうち、長沙窯系陶磁器の再整理成果を報告した。今回報告しきれなかった資料、さらには他機関の所蔵資料も踏まえ、平城宮・京出土の陶磁器の特徴や生産地・流通形態について検討を継続したい。

(丹羽・陳)

表4 報告資料概要

番号	次数	器種	遺跡名	出土遺構・層位	備考
1	57	水注もしくは壺	平城京東三坊大路東側溝	SD650 B	『学報23』 PL.73 552 『貿易陶磁』 212-1
2	57	水注もしくは壺	平城京東三坊大路東側溝	SD650 A	『学報23』 PL.73写真のみ掲載 『貿易陶磁』 212-4
3	57	水注もしくは壺	平城京東三坊大路東側溝	SD650 B	『学報23』 PL.73 552 『貿易陶磁』 212-6
4	57	水注もしくは壺	平城京東三坊大路東側溝	SD650 B	『学報23』 PL.73 552 『貿易陶磁』 212-11
5	57	水注もしくは壺	平城京東三坊大路東側溝	SD650 B	『学報23』 PL.73写真のみ掲載 『貿易陶磁』 212-5
6	57	水注もしくは壺	平城京東三坊大路東側溝	SD650 B	『学報23』 PL.73写真のみ掲載 『貿易陶磁』 212-14
7	88-21	水注	薬師寺旧境内	西僧房床面	『薬師寺報告』 PL.110 177 『貿易陶磁』 224
8	131-35	椀	法隆寺旧境内（聖霊院・綱封蔵南地区）	土坑 4	

本研究を進めるにあたり、平尾政幸氏（元京都市埋蔵文化財研究所）、尾野善裕氏（京都国立博物館）にご教示をいただいた。本研究はJSPS科研費JP23KK0011の助成を受けたものである。

註

- 日本語では施釉する硬質・高火度の焼き物の呼称として「陶磁器」が用いられるが、中国の場合、焼き物全般を「陶瓷器」と称し、近年は日本でもこの用語を用いる研究者が増えつつある。本稿でも中国と日本で出土する資料を相対的に評価するため、「陶瓷器」を用いる。
- 中国では、長沙窯が『茶経』で「越州瓷岳瓷皆青」と評価された岳州窯の系譜を引くと考えられているため、黄色がかかる長沙窯の製品を慣習的に「青釉」・「青瓷」と呼ぶことが多い。日本では広義的に青磁として捉えられるが、個々の製品を「黄釉」に分類することが多い。
- 現状において、平城宮内からは長沙窯系陶磁器は確認できていない。
- 長沙窯課題組編『長沙窯』紫禁城出版社、1996。周世榮「岳州窯源流考」『金石瓷略考古論叢』岳麓書社、1998。楊寧波「長沙窯出土窯具と相關問題の初步研究」『四川文物』2012-1、2012。
- 長沙窯課題組編『長沙窯』紫禁城出版社、1996。
- 長沙市文化局文物組「唐代長沙銅官窯址調査」『考古学報』1980-1、1980。
- 周世榮「長沙唐墓出土瓷器研究」『考古学報』1982-4、1982。
- 長谷部楽爾「長沙の陶器－唐・五代の瓦渣坪窯とその周辺」『MUSEUM』190、1967。三上次男「長沙銅官窯磁－その貿易陶磁的性格と陶磁貿易」檀原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』臨川書店、1993。
- 亀井明德『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版、1986。土橋理子「日本出土の古代中国陶磁」檀原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』臨川書店、1993。長谷部楽爾・今井敦『中国の陶磁12 日本出土の中国陶磁』平凡社、1995。
- 三上次男「長沙銅官窯磁－その貿易陶磁的性格と陶磁貿易」檀原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』臨川書店、1993。

- 今回報告する1～6・8の径の残存率はすべて10%未満のため、復元値の信頼度が低い。
- 1～6はこれまで越州窯青磁として扱われてきたが（檀原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』臨川書店、1993）、白化粧土を施した特徴から長沙窯系陶磁器として考えたほうが妥当だと判断し、今回改めて報告をおこなう。
- ロクロを回転させながら外部から器を締めることで粘土が圧力を受けた結果、逆方向へ戻ろうとする力が働いたため、器の内面に逆方向に向かって捻じれたような斜めの皺が観察できる。
- 薬師寺僧房は天禄4年（973）に焼失した記録が残る。
- 7は『薬師寺報告』で報告済みだが、今回の報告にあわせて加筆の上で再トレースした。
- 奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会編『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺、1985。
- 類例として、長沙窯課題組編『長沙窯』紫禁城出版社、1996のA型Ⅰ式碟（図81）が挙げられる。

挿図出典

- 図41 『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』PLAN26、『学報 76』Fig.2をもとに作成。
- 図43 1～6・8：陳実測・トレース。
7：『薬師寺報告』PL.110 177を加筆・再トレース。

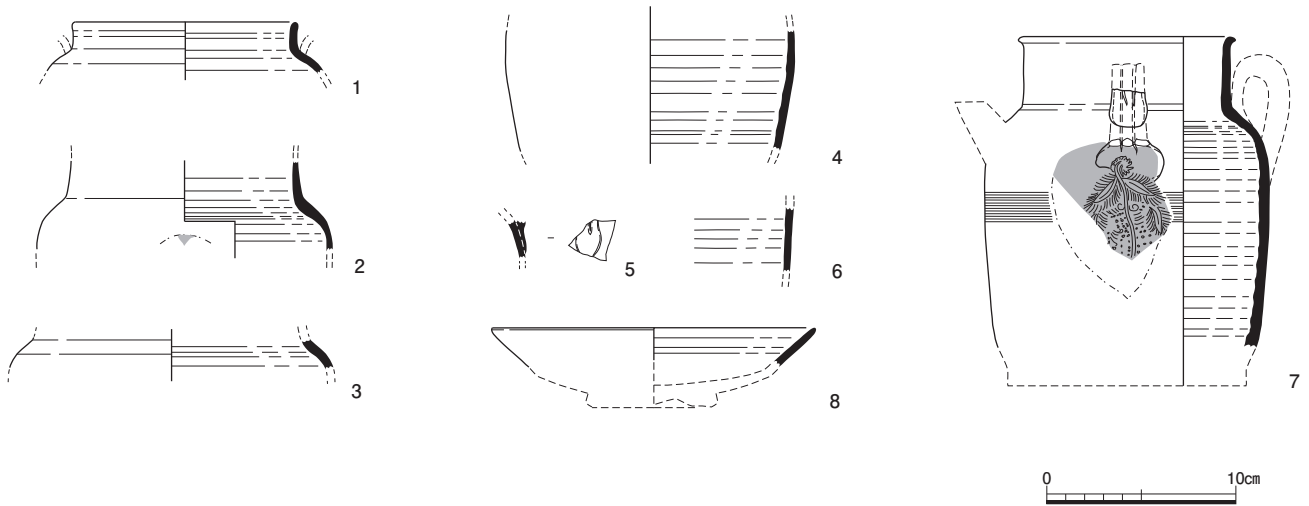


図43 平城京および周辺寺院出土長沙窯系陶瓷器（1：4）

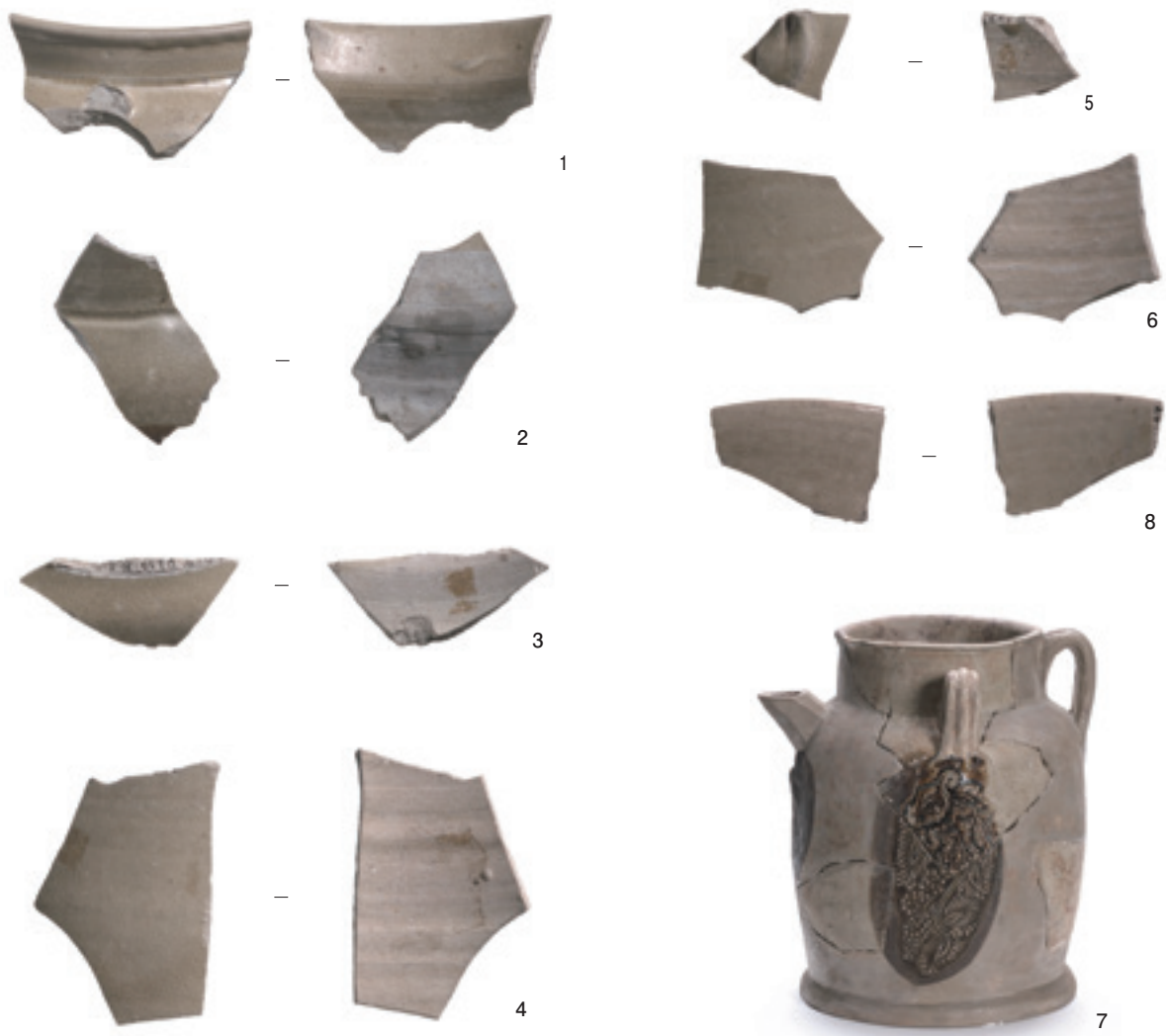


図44 平城京および周辺寺院出土長沙窯系陶瓷器（縮尺不同）